

1. 2淀川大堰～三川合流点

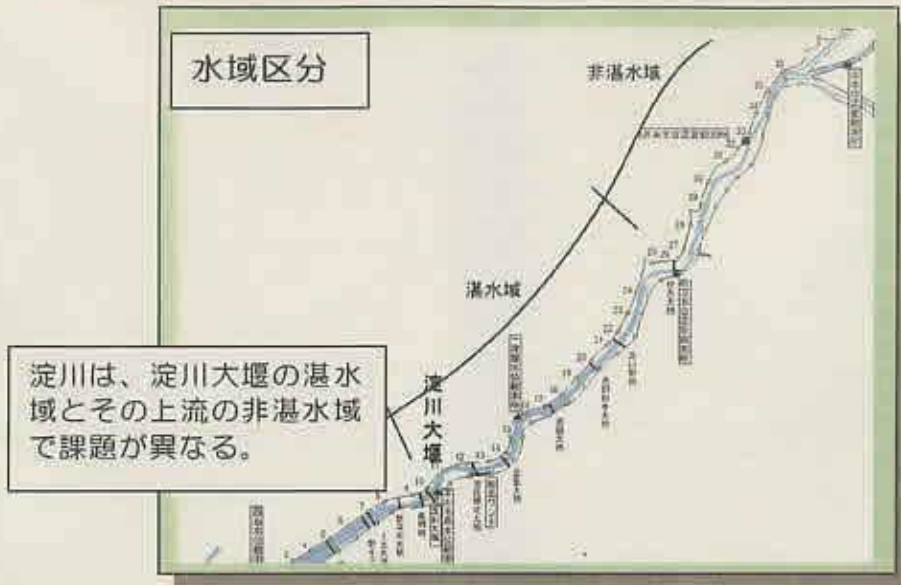


図 1-12 水域区分図

●河床低下

距離標 10k から 20k 付近までは、河床がおよそ 0.5m～1m 程度低下しており、その上流についてはおよそ 1m～3m 程度低下している。

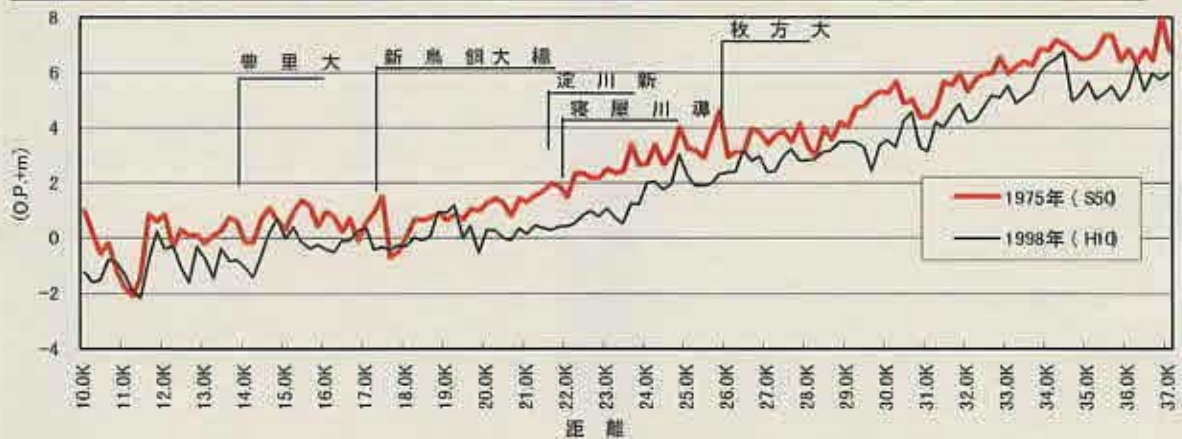


図 1-13 平均河床高縦断図 (1979年(S54)、1998年(H10))

●河床低下にともなう水位低下

非湛水域では、年間を通しての水位低下がみられ、湛水域では平常時水位の上昇がみられる。

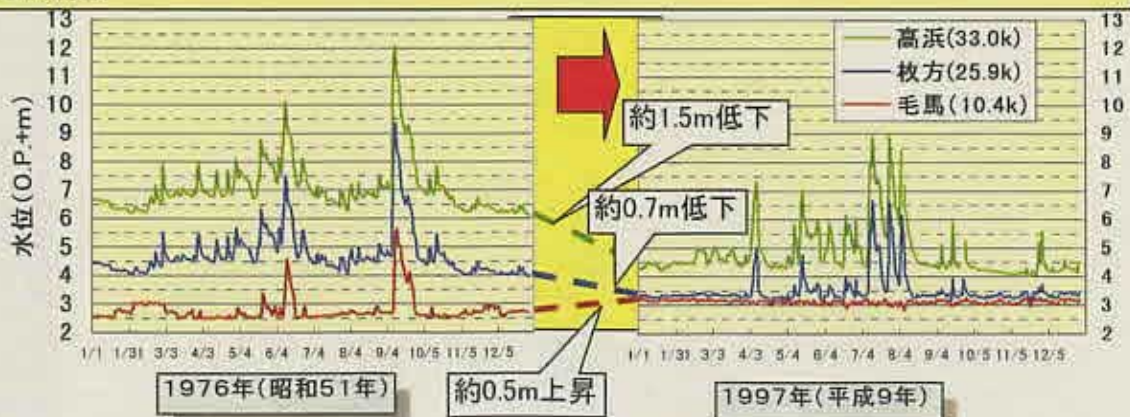


図 年間の水位の変化

(1) 淀川大堰の湛水区間の河川改修や水位の安定にともなう冠水頻度の減少
 に対する改善

現状の課題

淀川大堰の湛水区間は人為的な水位管理により平常時の水位が安定し、出水時においても水位変動が小さく、攪乱や高水敷への冠水が極端に減少し、水域の沼化、河川植生の陸性化、魚類の産卵場所となるたまり、わんどなど一時的水域が減少している。

● 低水路拡幅と河床掘削にともなう低水路断面の拡大

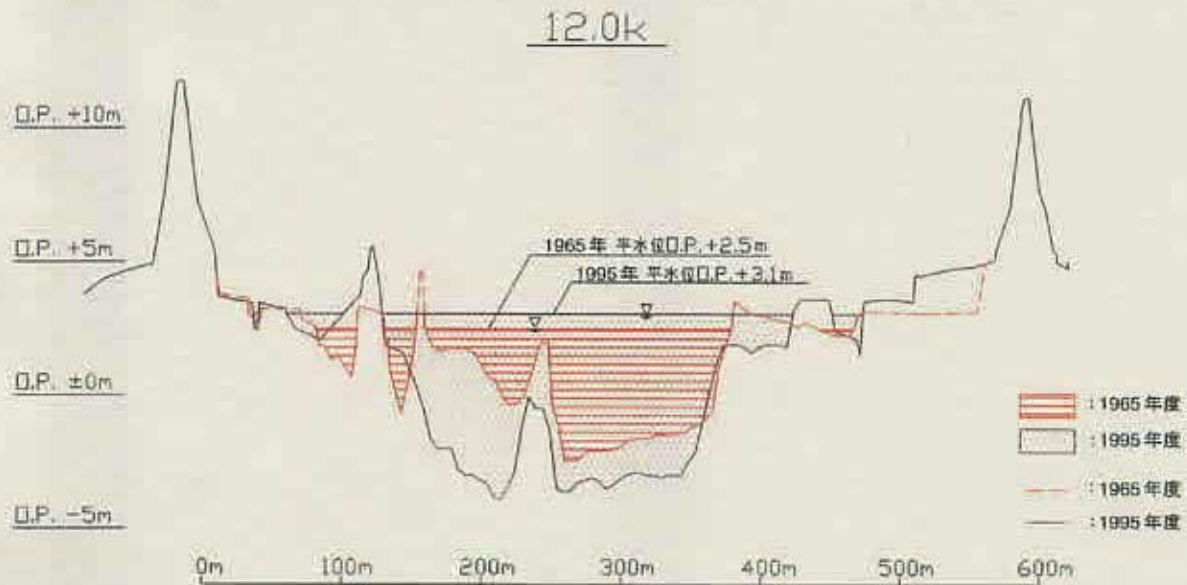


図 1-14 横断形状変化図 (1965 年(S40)、1995 年(H7))

● 水位上昇幅の縮小

同じ規模の増水時の水位上昇幅を比較すると、各地点において減少している。特に、下流(毛馬)においては、約 $2500\text{m}^3/\text{s}$ の流量の増加では、ほとんど水位が上昇しない。

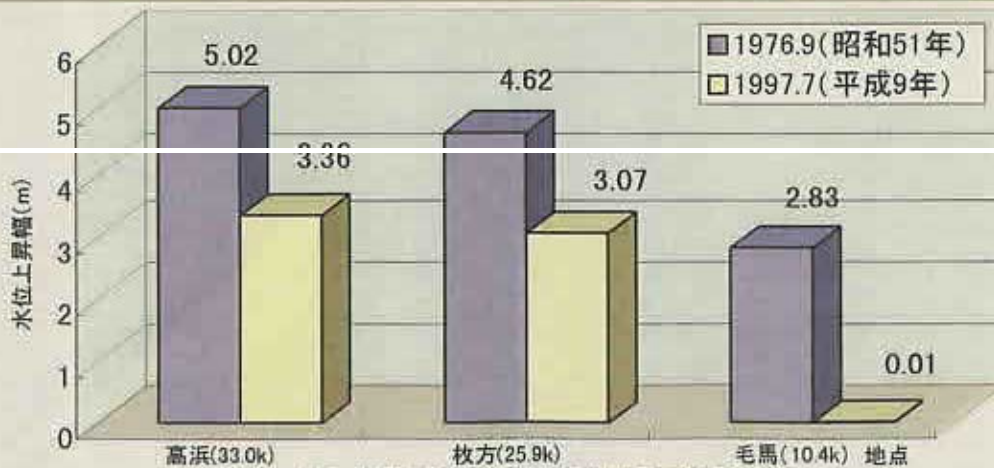


図 1-15 増水時の各地点の水位上昇幅の変化
 (枚方地点の流量が平常時から約 $2500\text{m}^3/\text{s}$ 増加したときの比較)

●城北わんど群の平常時水位の上昇と水位変動幅の縮小

1983年(S58)の大堰運用開始以後枚方の最大流量は変化がみられないものの、平水位はO.P.+3.0m近くまで上昇し、年最高水位は3.3m程度まで低下している。これは、大堰の運用によって、水位が上昇して安定していることを示している。

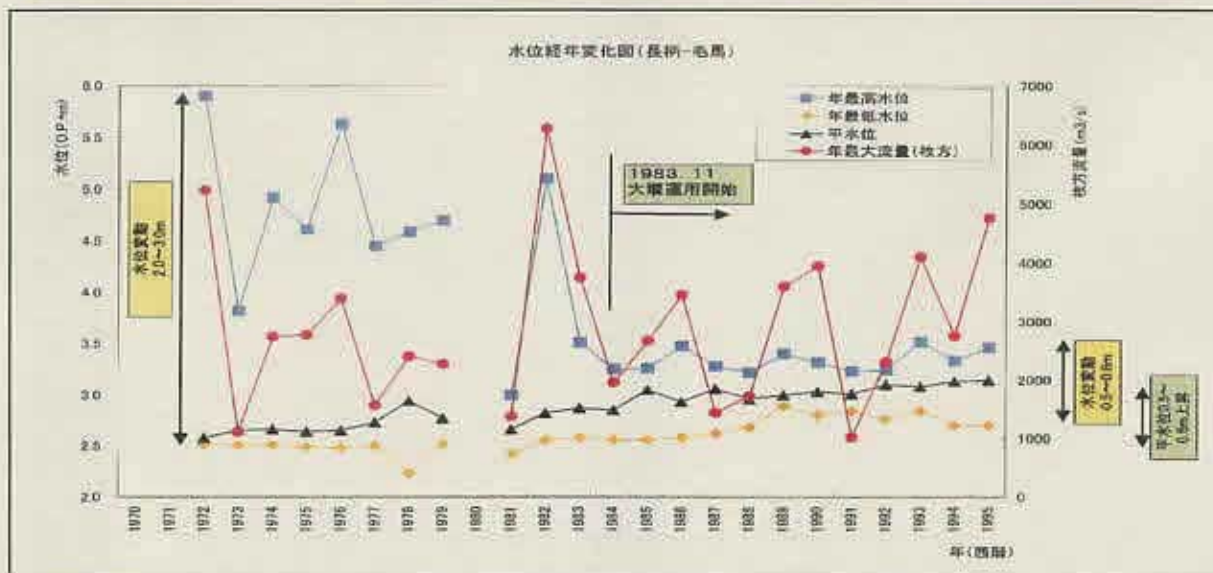


図 1-16 水位経年変化図（長柄-毛馬）

●城北わんど群の季節による水位変動の減少

季節による水位変動がなくなり、高水敷に冠水することがほとんどなく、安定した環境になったことを意味している。

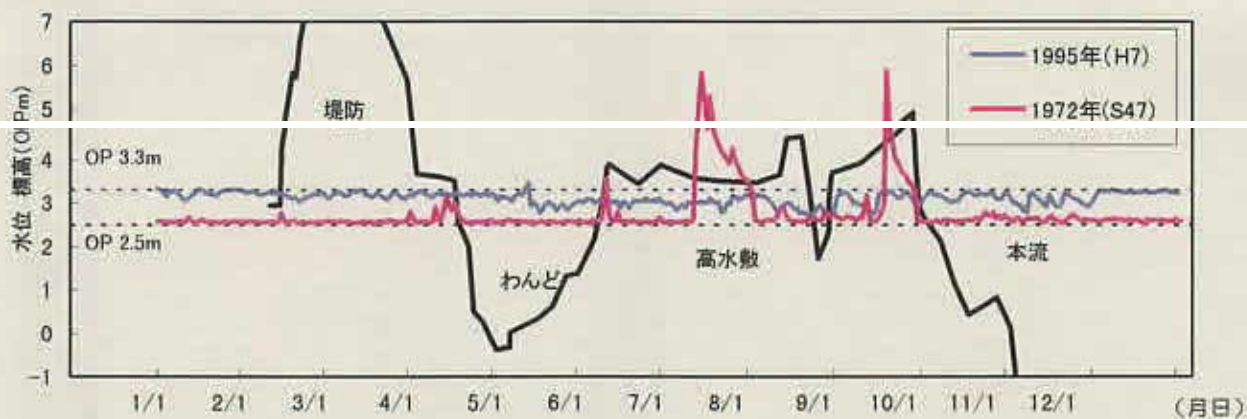


図 1-17 水位変動の比較図（1995年(H7)と1972年(S47)）